『恵みの神を示す声』ヨハネ5:9-18

5:9 すると、この人はすぐにいやされ、床をとりあげて歩いて行った。その日は安息日であった。
5:10 そこでユダヤ人たちは、そのいやされた人に言った、「きょうは安息日だ。床を取りあげるのは、よろしくない」。
5:11 彼は答えた、「わたしをなおして下さったかたが、床を取りあげて歩けと、わたしに言われました」。
5:12 彼らは尋ねた、「取りあげて歩けと言った人は、だれか」。
5:13 しかし、このいやされた人は、それがだれであるか知らなかった。群衆がその場にいたので、イエスはそっと出て行かれたからである。
5:14 そののち、イエスは宮でその人に出会ったので、彼に言われた、「ごらん、あなたはよくなった。もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの身に起るかも知れないから」。
5:15 彼は出て行って、自分をいやしたのはイエスであったと、ユダヤ人たちに告げた。
5:16 そのためユダヤ人たちは、安息日にこのようなことをしたと言って、イエスを責めた。
5:17 そこで、イエスは彼らに答えられた、「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」。
5:18 このためにユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうと計るようになった。それは、イエスが安息日を破られたばかりではなく、神を自分の父と呼んで、自分を神と等しいものとされたからである。

●序論
先週に引き続き３８年間寝たきりの病の方が、イエス様との出会いを通して癒されるという奇跡とその後を見て行きます。その時のことがらはこうでした。
5:8 イエスは彼に言われた、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」。
5:9 すると、この人はすぐにいやされ、床をとりあげて歩いて行った。
ただ、ここで、このすべてに強烈なＮＧを出す人たちがいたというお話です。

●本論
Ⅰ．神の恵みに一歩を踏み出す
ここに３８年もの年月。彼の心は、その場に横たわる日常の中、治らないことへのあきらめ、誰も助けてくれない…ことへの恨み心、自分の人生に対するいらだちなど…様々なものが入り交じっていたことを見ました。

実際にイエス様が「なおりたいのか」という問いかけに対して、自分の置かれている現状への諦めと周囲の憐れみの無さをつぶやく言葉が一気に吹き出してきて、まっすぐ「治りたいです」という答えにはなりませんでした。
そんな、信仰的にも正解とはいえないような、この心の深い痛みさえをも抱える病人

の答えを受け取り、そして包んで、イエス様はこの人を癒されました。
この人へのイエス様の言葉はこうでした。
:8 …「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」。
その声は、彼の信仰を呼び起こすとともに立ち上がることができたのです。
:9 すると、この人はすぐにいやされ、床をとりあげて歩いて行った。

３８年を経て、イエス・キリストと出会って、彼は癒しを経験しました。
しかし、彼が語られたのは、それだけではなく、イエスさまの声を聞き、その恵みのもと、新しい人生へと一歩踏み出すことでした。
彼にとって、その場所は、勝手知ったるわが家、そこにいれば、そこで何が起こるか大抵のことがわかる。
彼は、イエスさまの声、その言葉に従って、そこから離れて、神の恵みの中で一歩を踏み出した。この姿こそ注目すべきありさまでした。

洗礼もそういう出来事です。
洗礼を受けて、そこでいきなり周りの風景や、環境が変わるのではないでしょう。
しかし神さまの恵みの中踏みだす一歩を通して着実に新しい人生が築かれて行くことをぜひ知っていただきたいのです。聖書は証言します。
２コリント5:17 だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。

Ⅱ．恵みで期待を新たにされる
この床を担いで歩き出した人の姿を見て、ＮＧを出す人たちが現れました。
それは、安息日の規定を何にもまさって大切にするユダヤ人たちでありました。
5:10 そこでユダヤ人たちは、そのいやされた人に言った、「きょうは安息日だ。床を取りあげるのは、よろしくない」。
彼らユダヤ人たちは、「安息日にいかなる労働もしてはならない』ということを重視していました。そして彼らは、この癒された人が「床を担いで歩いている」ことをそれは罪だと非難したのです。
”ただその日が安息日であった”ということと、それを指示した人がいたことが、ユダヤ人たちの非難するとこでした。それは彼らの持つ権威に反することでもあったからです。
本当の神さまの御心を見えなくするものが、いわゆる”律法主義”の中にあるゆえんです。
申命記15章には、十戒に示されるこの安息日についての戒めが説明されています。
：12　「安息日を守ってこれを聖とし、あなたの神、主があなたに命じられたようにせよ。…
そう語り、
5:14 七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。…
…と確かに、安息日の労働を禁じています。ただその先の理由に目を向けるのです。

5:15 あなたはかつてエジプトの地で奴隷であったが、あなたの神、主が強い手と、伸ばした腕とをもって、そこからあなたを導き出されたことを覚えなければならない。それゆえ、あなたの神、主は安息日を守ることを命じられるのである。

ここにユダヤ人が安息日を守る理由が、神さまの側から示されています。
それは神さまが自分たちを救って下さったことを覚えるため、その日を聖別して神さまを思う日とすることが目的でした。
今、わたしたちがイエスさ・キリストの十字架とよみがえられた復活の主の日、日曜日を覚えてこの日に礼拝をささげることと目的は同じです。

それは、自分たちを救って下さった神を、第一にし、心から思うためなのです。
そしてそれは、わたしたちの今の新しい人生を形づくっていることを覚えることができるからです。

あのベテスダの池での病の人が、長い年月の中で見失ってきたこと、忘れかけていたこと。それは、神さまを本当の意味で思い起こすことでした。
イエスさまは、期待の無い、マンネリ化した生活に、あの日イエスさまは触れてくださったのです。

それは、あのユダヤ人たちもそうです。神さまに期待する事を忘れ、自分たちが、自分の力でいかに律法を守り、正しく清く、人よりも立派に生きるか、注目されるかに強く心が支配され、神さまの御心や愛や神さまの恵みの大きさへの関心を失っていたありさまがあったのです。
本来、そんな心に気づきを与えるのがこの安息日での祝福でした。
だからイエスさまがあの呼びかけを心に留めることです。
「起きよ」と言われた方は、どうじにわたしたちに「目を覚ませ」と呼びかけ、わたしたちの神さまへの霊的関心、霊的期待感にのぞまれるのです。
教会の対話は「信仰」と期待が語られる場であり、交わりでありたいのです。
ヘブル12:1-2
さて、信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである。 昔の人たちは、この信仰のゆえに賞賛された。

Ⅲ．恵みの神と共に働く
他の福音書でも、次々と安息日に病の人を癒すイエスさまのお姿があり、またそこには、やはり当時のユダヤ人たちとの議論があったことがわかります。
イエスさまは、ある時ユダヤ人たちに安息日での病の癒しをめぐり尋ねました。
ルカ6:9-10
6:9 そこでイエスは彼らにむかって言われた、「あなたがたに聞くが、安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」。
6:10 そして彼ら一同を見まわして、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、その手は元どおりになった。

つくづくイエス様の歩み、言葉、そしてその御業には、神さまの御思いと憐れみが深く現れています。イエスさまは神さまの御心に生きるからこそ、律法主義やユダヤ人たちの細かな規定からも自由でした。

イエスさまのように「愛を大切にし、愛を純粋な動機として生きる」ことを大切にする。

あのイエス様は安息日の規定に拘束されず、神さまの愛にこそ生きて歩みました。

罪人を招き、病の人に触れて癒し、幼子を迎える。

イエス様は、先の癒しの場で言われます。

ルカ6:9…「あなたがたに聞くが、安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか」。

●最後に

彼の新しい人生はこれからです。いきなり彼の人生はバラ色というのではななく、その一歩一歩に神さまの導きをいただく歩みが始まったのです。イエス様は、かれに「もう罪を犯さないように…」(：14)と語りました。

「罪」それは、真の神様に背を向け、無視して生きることです。

彼は、癒しを受け取り、神に背を向けていた歩みを捨て、神さまに目を向けて生きる新しい人生の恵みへと進みだしたのです。

ただ、そういう中で、罪を退けて歩みぬくために、神さまの恵みが必要なのです。

イエスさまは、ここで、恵みの神を指し示してこう言われました。

:17）…「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」。

イエスさまは、今もわたしたちの救いのために働いてくださっている神を指し示します。この方こそ恵みの神さまです。

私たちは、今「私は愛されているから大丈夫」ということのできる安心の真ん中に生きて行くことができます。

たしかに「信仰」に歩んでいても、今の自分はどこに導かれているか、どこへ向かっているか、とその全て知ることはできません。

でも、わたしは神を信頼します。わたしを導いてくださっている方を愛しているし、また知っているのだ、告白できるのです。

それはイエスさまご自身が指し示す、恵みの神への信頼の告白です。

それが今捧げているこの礼拝の祝福でもあるのです。